

「間」の大切さ

鹿児島島の溝先生より突然の電話。考えてみると大学卒業以来17年ぶりの会話。懐かしさについ長電話をしてしまい、気がつくとも原稿を書くことに。



私は今、能楽の小鼓の稽古に通っています。もちろん素人ですが。能といえば最近、ユネスコの世界遺産に登録されたことをご存じの方も多いと思います。約650年もの長い伝統を持つ芸能。

その囃子（はやし）に鼓が使用されています。

今回、この「鼓」のことについて少しふれてみたいと思います。鼓には大小2つの種類があり、太鼓と違って撥を使わず手で打ちます。

大鼓は大皮とも呼ばれ、少しだけサイズが大きい鼓です。小鼓との違いはその音色にあります。

大鼓は皮を炭火であぶって乾燥させ（焙じるという）調緒と呼ばれる紐できつく締め、金属音にも似た高い音を出します。皮も消耗が激しいとのこと。小鼓は逆に皮に湿り気を与え、調緒もゆるめにして、調緒を握ったり緩めたりしながら高低の音を出します。いわゆるトーキングドラムと同じ原理です。皮は大鼓と違い長く使います。古いものでは、江戸時代からのものもあり、すばらしい音が出ます。湿り気を与える方法は、息をかけたり、皮に唾をつけ調整します。少々唾臭いです。

雨の日などは小鼓がよく鳴り、湿気の多い日は鼓日和といえます。他の打楽器やスピーカーのように、直径の大きいものは低音という図式はこの楽器には当てはまらないようです。音の高低を湿度で調整するのはあまり知られていないことと思います。

湿潤な日本ならではの発想なのでしょうか。

鼓に限らず能に使用する楽器や道具は、古くからのものを大事に使っていて、道具を見るだけでも伝統という長い時間を感じとることができます。



鼓の稽古についてですが、暗譜が基本です。憶えていないことには話にならないからです。なぜなら「間」の大切さを第一に考えているからだと思います。能楽に指揮者はいません。基準となるリズムもありません。曲の流れのなかで、早さが変わります。合わせる相手が変わります。もちろん自分が引っ張っていかなければならないところもあります。そのためには各自が間合い（責任）をしっかり意識しなければならないこと。そのうえで人に合わせる場所、自分がリードしていくところの切り替え。緩急のタイミング、すなわち「間」をしっかりと認識しておかなければいけないこと。そして「間」によって初めて調和が生まれるのだ、ということが少しわかってきたような気がします。考えてみると、われわれの日常生活のなかにも「間」が大切なことが多いようです。「間」は時間、空間を総括する大切な感覚なのかもしれません。

最後に、今年の干支にちなんで……。

鼓の皮は馬の皮を使っているそうです。胴は皮が馬ですから、サクラの木です。



今回は、茨城県立水海道産業技術専門学院の澤出先生です。学生時代サイクリング部の後輩に当たります。研究熱心な機械の先生です。

どうぞ宜しく。